



太陽の娘

南海部 覚悟



一人旅の夜は、想いのほか寂しいものです。

ホテルの部屋の温もりをあとにして、瞬くネオンに賑わいを求め、寒々と夜の街をさまようことも、よくある話です。

ところが、寂しさの反面、初めての街の飲み屋のドアを、連れもなくひとりで開けるのは、意外に勇気の要る行為で……特にカラオケの歌声や、大きな笑い声が漏れ出る路地などは、逆に怖じけづいてすぐに退散したくなります。

そんなとき私は、更に奥の一番奥の、場末のドアを探します。

その夜出逢ったドアも、そうやって探し当てたドアでした。

「あら、いらっしゃい。」

薄暗いカウンターボックスの奥から、甲高い声が出迎えてくれました。



「昇子ちゃん、お客さん……おしぼり。」

「お客さん初めて？」

「一見さんはいけませんか？」

「とんでもない、大歓迎！」

長いストレートの栗色の髪が、健康そうな小麦色の頬を際立てる、トロピカルな美人ママです。

ママに呼ばれてカウンターの向こうに顔を出したのは、まるで正反対の、和風色白ポッチャリギャル……。

「お客さん、僕ひとり？」

「そうなの、最近この街景気悪くて…常連さんのグループがさっきまで居ただけど…水割りでもいい？」

そのとき、どやどやと新手のグループが入ってきました。

「昇子ちゃん、悪いけどこちらお願いね……いらっしやい、ご無沙汰ねえ！」



「しょうちゃんって…どんな字書くの？」

ママに代わって水割りを作ってくれた、ポッチャリギャルに尋ねました。

「太陽が昇る、のぼる子って書いて"しょうこ"…あまり好きじゃ無いんだけど。」

「どうして？いい名前じゃないか。」

「字だけみると、男の子みたいでしょ。子供のころよく間違われて……。」

ママほどの煌めきはありませんが、健康な清潔感のある明るい娘です。

よく話を聞くと、二人は歳の離れた姉妹で、早くに亡くなった両親が遺したものを元手に、姉がこの店を始めたようです。

「でも似てないね、お姉さんとは……。」

「失礼ね、でもよくそう言われるの。姉ちゃんは私より背も高くて美人だし。」

「でも、ここじゃ君のほうがもてるんだろ？」

「……？」



「男ってのはね、世間一般に美人って謂われる女性には、何処かに同性を感じるものだよ。一瞬躊躇してすんなりと馴染めない、そこいくと君のようなポッチャリ系は……。」

「なによ！それこそ失礼じゃない。」

カラカラと笑う昇子に、一切の屈託はありません。

昇子は、福山でインテリアデザインの勉強をしていました。

私が一級建築士だと聞いた途端、私を見る眼が変わります。

「昇子ちゃん、あれやってみれば？ 他のお客さん、帰ったし……。」

ママの声に我に換えると、賑やかだったグループも既に引き上げて、再び私独りだけ貸し切りの状態に戻っていました。

タバコをくわえて昇子の方に向き直ると、「ねえ、そのままじっと動かないでね。」

タバコの先に両手を合わせ、一心に念じはじめます。ママも唇に人差し指を立ててそれを見つめます。

合わせた手の周りを、何やらぼんやりと光りが纏わり着きはじめたと思った瞬間、パン！と拍手が打たれ、部屋中一気に光りが溢れます。

ゆらゆらと残光の美しさに見惚れていると、驚いたことに、タバコの先に小さな火が点いていました。



「建築は人間にとって景観の一部だから、いい建築デザインってのは、人がそれに馴れてしまうと、自然に溶けて消えてしまうものだと僕は思う。」

「どうして？」

「君は、お姉さんのスナックが入っているビルの外壁が、どんな仕上げだったか覚えているか？」

「——濃いグレーだったのは覚えているけど？」

「濃いグレーの打ち込みタイル、商業ビルにはめずらしい……。」

千光寺公園の美術館のベンチから、尾道水道を見下ろしながら、二人の会話が弾みます。

尾道市内に担当監理現場を持ったのがきっかけで、店に何度も通うようになると、昇子は、暇な日中付き合ってくれるようになりました。

最初は、姉の同伴があったのですが、やがて面倒臭くなったようで……。



「だから、何時までも建築が人をひきつけていられるのは、景観となり得ない部分 "パーツディテール" の手柄なんだ。その意味で、インテリアやエクステリアデザインは重要だと思う。」

「そうね、直接人が手に触れるのは、手摺りやドアノブ、スイッチや水道の蛇口なんかの小物なのよね、実習で新築マンションの見学によく行くんだけど、印象に残ったデザインはサッシのクレセントだけだったりして……。」

「シャルロット・ペリアンって知ってるか？」

「家具デザイナー？」

「そう、あのコルビュジェのジョブパートナー、同時に戦後日本の家具デザイン、インテリアデザインの黎明を支えたフランス女性だ。彼女の著作を読んでもいい、建築と家具、インテリアデザインの関係がよく分かる。」



尾道のような環境に育ったせいもあるのか、昇子は若い女性には珍しく、古い神社やお寺を巡るのが好きでした。

境内を吹き抜ける潮風の爽やかさが心地いい、夕暮れのしっとりした賑わいが、記憶の奥に懐かしい……そんな情感を理解する、良質な感性を持ち合わせていました。

千光寺山のロープウェイを降りて、長江小学校のグラウンド下の小径を巡り、御袖天満宮の有名な石段を昇って、大山寺、福善寺、所々で近所の飼い猫の鳴き声を感じながら、長閑な昼下がりの時間が、古い路地を充たします。

一面にモザイクタイルを路面に貼った、狭いだらだら坂を下りると、フラッターエコーの天井で有名な西郷寺、国宝の本堂・多宝塔が連なる浄土寺へと続きます。



「あのさあ、最初に出会った夜……。」

「最初に店に来てくれた夜？」

「僕のタバコに火を点けてくれたじゃないか、あれ結局どうやったの？」

「お姉さんが、掌にスッポリ納まるような、小さなライター使ってるのは、ずっとあとで見たことがある。」

「でも、それをあの時使ったとは、とても思えないんだ。」

「どうして？」

「熱くなかったんだ……熱を感じなかった、タバコ一本の距離で。」



高い天井のトップライトから、淡いブルーの月光が注ぎ込み、見上げる視点に青白いシルエットとなった娘の裸体が、ゆらゆら揺らぎます。

しまなみ海道生口島瀬戸田の、船着き場の正面奥に、老舗の洋風ホテルが一軒……西日光、耕三寺参道の賑わいから少し外れた海沿いで、目立たない佇まいは、地元の間か、余程常連の釣り客以外、知りようのない宿です。

気の合う若い男女が、深い仲になるのに時間は要しません。

いくら美人でないといっても、そこは若い娘、男の欲情をそそり立てるだけの妖艶さは、その白い裸体が当然に備えています。

昇子が他と違うのは、その滑らかな裸体のラインに沿って、ぼんやりとした光りの帯が、さながらオーラのように揺らぎながら、纏わりついていることです。

所々パッと輝いて、ラインに沿ってゆっくりと拡がり、やがて再び一点に集まり、気がつくくと消えている。

月光の反射でもないし、静電気のスパークとも全く違う、何やら光りに意識があって、人の物語りの起承転結を、そのまま辿っているようで……。



ぼんやりそれを眺めていると、昇子が顔を突き出して----

「なにじろじろ見てるのよ、嫌らしいわね。」

「きれいだ！」

「私が、光りが？」

「----どっちもだ。」

「嫌らしい！」

そのまま更にぼんやりしていると----

「ねえ、なに考えてるの、もっと嫌らしいこと？」

「僕の分身が、君の濡れた唇を欲しがっている。」

「いやだ、一番敏感なところ……。」

「そう、皮膚と粘膜の境目、男と女の瀬戸際。」

「----いいわ、私の瀬戸際にいらしゃい、あなたの分身可愛がってあげる。」

皮膚と粘膜とを練り合わせた男女の交渉に、ひと通りの汗をかくと、二人を共通のけだるさが包みます。

物憂げな目で、天井を見上げていた昇子が急に体を起こして----

「ねえ、あれなに？いやだ！可哀そう！」

視線を追って見上げると、暗いトップライトの外側で、鳥が一羽ばたばたもがいています。

白い羽毛が月光に輝いて、種類は判りませんが燕ほどの大きさです。

よく見ると脚に細い紐が絡み付いて、それが屋根の何処かに引っ掛かって動けなくなっているようです。



「助けなくっちゃ----。」

「無理だよ、屋根の上だぜ。」

「なんとかなるわ……。」

鳥に向かって、右手の人差し指と中指を重ねて突き出すと、タバコに火を点けたときのように、左手で大きく拍手を打ちます。

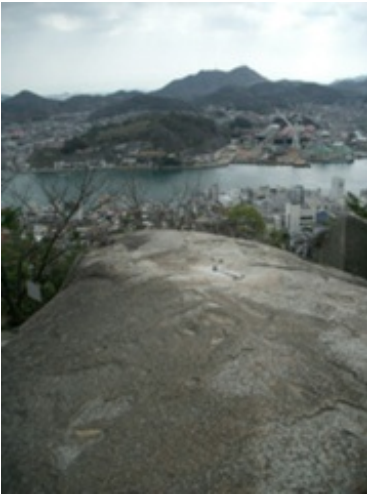
一瞬の閃光が強いビームとなって、トップライトのガラスを貫き、鳥に絡まった紐を断ち切りました。

蒼い煙りのようなものが辺りにたちこめ、何か燃えたような臭いが鼻を衝きます。

トップライトの上から、今は自由になった鳥が、頭をもたげて覗き込んでいます。

礼を云うように二三度首を振ると、暗い空へ飛び立ちました。

後には鋭く切られた紐の端が、冷たい夜風になびいていました。



あの日から、長い年月が過ぎ去りました。

担当監理現場が竣工した後も、一年ほど尾道の店に通い続けたのですが、徐々に疎遠になり、私が沖縄に転勤し、昇子が大阪のデザイン事務所に就職するに及んで、年賀にお互いの音沙汰を確かめる程度となってしまいました。

結局、彼女の特殊な能力の理由は、彼女の子供の頃の希薄な記憶に頼るほかありませんでした。

「それで、その別府の学者に、広島大学の研究室で調べてもらったの？」

「そう、全身すぽんぽんにされて、真っ暗な部屋に入れられて……。小学校に上がる前だったけど、恥ずかしくて厭だったわ。」

「----で、何だって？」

「ショウタイ コチャク プリズムだって……。その人、眼を剥いて何度も繰り返すの、わたし怖くなって泣き出したのよ。」

「小体固着プリズム----何のことだろう？説明は？」

「両親にはあったんだと思うけど……。そうそう、その時その人からこれを貰ったの。」と云いながら、昇子が見せてくれたのは、鶉の卵大の銀色に輝く金属球でした。



「熱タマゴって云うの、水の中に沈めると、お湯が沸くのよ。」

お守り代わりに何時も持ち歩いているそうです。

「貴方の分身の、両側にぶら下がっているのと、同じくらいの大きさでしょ、頬ずりするとヒヤッとして気持ちいいのよ。」

ころころと笑いながら、きわどい話をさりげなく話せるようになったのも、私と知り合ってからです。

「柏手でタバコに火を点けたり、紐を切ったり出来ることは？」

「目の前でやって見せてあげたわ……。最初は信じられない様子だったけど、遊び半分にあまりやらないほうがいいって、云われたわ。」

ある科学雑誌の記事の中に、“生体膠着プラズマ”という言葉を見出だしたのは、それから十年ほど後のことです。



低温のプラズマが生体の表面に生成され、比較的長い時間生体に纏わり付く……信じられないことですが、多くのいわゆる "心霊現象" を説明するツールとして、今注目されているというものでした。

そして、私の眼を引いたのは、記事の最後にあった "常温核融合" という言葉でした。

心霊現象は別としても、比較的長い時間プラズマが保持されるのであれば、それこそ比較的高い確率で、核融合反応が発生する。

拍手を打ったときの閃光とエネルギーは、常温核融合のそれではないのか。

私は昇子の体が心配になりました。

核融合の反応生成物として、当然に高エネルギー中性子が考えられます、拍手を打つ度に昇子の体は強い中性子線に曝される……明らかな外部放射線被曝です。

拍手以外にも、昇子の体の周りで核融合が発生することは容易に想像できます。

あの白い滑らかな肌が、今のこの瞬間も、放射線の照射に苛まれていると考えると、じっとして居られない想いがあります。

エンディングパターン①



【エンディングパターン①】

意を決して携帯の電話帳を検索します、発信ボタンを押そうとした途端、本人の姉から電話が掛かってきました。

姉の涙声に予兆を感じます。

「昇子病気なの……残り時間がないの。」

全てを了解し、身の回りの物をまとめ、そのままバッグひとつで尾道に向かいました。

おわり。

エンディングパターン②



【エンディングパターン②】

じっとして居られない想いと同時に、頭の半分は "ありえない" という意識に駆られていました。

机の引き出しの奥を探って、年賀状の束を出します。

下から三枚目に、若い夫婦と二人の子供の写真をプリントした葉書がありました。母親は昇子です、立派な配偶者とともに理想の家庭を築いていました。

同じ科学雑誌の記事は "強い被曝環境の中で最も阻害される生命活動は、正常な繁殖である" と述べていました。

ああ、昇子は子供を産んだんだ・・・二人ともちゃんと育てている。

“ありえない。”

おわり。



【エンディングパターン③】

一週間後のことです。

思いがけず、昇子から小包が送られてきました。

中にはあの熱タマゴが入っていて、同封された手紙によると、"体の廻りの光りがなくなった、拍手を打っても閃光が出なくなった、普通の体に戻った" と書かれていました。

私にはもう必要ないから、熱タマゴを受け取って欲しい、尾道での思い出は忘れない……と。

内部被曝ではないので、体の障害は今後恐らくもう出ないでしょう。

これが文字通り "お守り" として昇子の体を守ってくれていたのかも知れません。

熱タマゴは、昇子の思い出とともに、私の机の上に鎮座しています。

おわり。

太陽の娘

<http://p.booklog.jp/book/83995>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/83995>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/83995>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ